

【親鸞部門・最優秀賞】

神様がくれた宝物

大谷高等学校 第3学年 田原 舞衣子

小学三年生の夏のある夜、その日の晩御飯はやけに豪華だった。私は父に問いかけた。「なんで今日のご飯こんなに豪華なん？」すると父は、「なんでやと思う？」と聞き返した。兄と私で、結婚記念日や誰かの誕生日など私達は正解を見つけようとしたが当てることはできなかった。そしてついに父が発表した。「ママのお腹に、赤ちゃんがいます。」私はその言葉を聞いて私が最初に発した言葉を忘れもしない。「いややー！」

もし今の私なら、びっくりはするが、おめでとうとすぐに言うだろう。しかし当時の私が真っ先に考えたことは、末っ子ではなくなるということだった。今まで2人兄妹の下の子としてちやほやと可愛がられていたのに、9歳も下の赤ちゃんが我が家にやって来るなんてきっと親や祖父母の関心はそちらに向く。そう考えたのだ。しかしこの思いは、母のお腹に手を当てて胎動を感じたり、生まれてくる赤ちゃんの準備をしたり、そして生まれた瞬間には完全に消えていた。むしろ嬉しいと思った。なんて可愛いんだろうとも思った。母が退院するまで毎日産婦人科に通ったし、赤ちゃんを見に行くのが楽しみで仕方がなかった。

私は5人家族になったことが私の宝物だと思う。たった一度きりの人生の中で、私に妹という存在ができたのだ。離乳食やおむつの替え方など小学生だった私にはどれも貴重な経験だった。もし私に将来子供ができれば、この経験は間違いなく役に立つし、妹のことを思い出すんだろうなと思う。そう思うと父と母には感謝でいっぱいである。4人家族だった頃も、5人家族になった今も、変わらずに沢山の愛で大切にしてくれている。そしてこの5人で、たくさんの思い出をこれからも作っていきたい。

そんな妹が今、あの頃の私と同じ小学三年生になった。もし同じ発表がされたら、今は第一声になんと言うだろうか。